

横浜市立 豊岡小学校 学校評価報告書 (令和4～6年度)

重点取組分野	令和4年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
授業改善	①授業のユニバーサルデザイン化を図り、誰もが「わかる」「できる」「楽しい」授業を目指すと共に、朝の時間を計画的に運用し、基礎・基本の定着を目指す。 ②子どもたちが主体的・対話的に学び、高め合うことができるように、自分の思いや考えを表現する活動を多く取り入れる。 ③一人一台の端末を活用し、個別最適な学びの充実を図る。	①紙書の構造化を図り、学習課題をつまみやすくなるように工夫しつつ、まとめまでの流れを簡略化し、子どもたちにとって、わかりやすく考えやすい授業づくりを行った。②ロイノートなどを効果的に活用し、自分の考えと友達のを関係づけ、比較し、より深い学びになるようにした。自分の考えを十分によりよく表現する学習場面については、次年度の課題としたい。 ③端末を効果的に活用することで、個別最適な学びにつながった。さらに利用の仕方を工夫し、より深い学びにつなげた。	B
人権教育	①学級や学年、たてわり活動の異学年による活動や交流を通して、相手を思いやる心を育む。②豊かな心の育成のために、道徳を重点研究の教科として取り上げ、よりよい授業づくりを目指す。③学級・学年・児童の代表委員会や人権委員会の取り組みを通じて、互いに見合う場面や、生活のさまざまな場面で、互いを認め合う活動を取り入れる。	①数少ないたてわり活動だったが、異学年が交流する中で、相手を思いやる姿が多く見られた。②道徳を重点研究としたことで、道徳の授業を通して、道徳的な価値を学び、自己決定できる子の育成を目指すことができた。③学級・学年・児童の代表委員会や人権委員会の取り組みを通して、互いに認め合う活動ができた。これにより、温かな雰囲気や自己を認める姿が見られた。	B
健康教育	①校医との連携を図り、歯・口の健康づくりを推進し、自らの健康についての意識を高める。②体育学習の充実を図ったり、運動する場所や機会をつくらせることで、運動に親しめるようにする。③栄養分野についての理解を深め、自らバランスのとれた食事をとれるよう、食育教育を推進する。	①むし歯も少なく学校医と協力しながら活動できている。引き続き活動を推進していきたい。②体育の授業や運動会などの行事を通して、子どもたちの体力に合わせた運動に取り組んだ。全校児童の運動に対する意識が高まっていることから、次年度は、運動に親しむ機会を創り、取り組むことで、運動能力の高まりを目指していく。③日頃の活動を充実させ、「なららランチ」の発行や栄養教諭も入った保健の授業を展開した。	B
地域学校協働活動	①学校だよりや学年だより、ホームページを通じて、学校の様子や学校の方針を積極的に発信する。②学校運営協議会では、学校経営方針について分かりやすく伝え、協議会からの意見をもとに学校運営の改善をしていく。③学校・地域コーディネーターとの連携を図り、学校と地域の連携が円滑に行えるようにし、地域学校協働活動本部の活動を充実させる。	①紙媒体の情報に加え、学校ホームページの運営担当を教職員の組織に位置付け、積極的な発信を行った。②学校運営協議会では、子どもたちの学校生活の様子ができるだけ伝わるよう、動画、写真等を用いながらお伝えし、多くのご感想をいただくことができた。今後、実際の子どもの活動を見ていただく機会を作りたい。③学校・地域コーディネーターとの円滑な連携を行った。今後、地域学校協働活動本部の活動のさらなる充実を目指していく。	B
いじめへの対応	①いじめ防止対策委員会へ、認知したいじめ案件を管理し、組織的に解消へ向かわせる。②YPアセスメントの分析を生かし、いじめが起こらないような学級の雰囲気をつくり、未然防止に努める。③いじめ防止等の研修を充実させ、全教職員のいじめに対する意識を高める。	①いじめ防止対策委員会では、いじめ案件を積極的に早期に認知することに努め、校内の組織的対応で解決に導くようにした。学年主任、児童支援専任、管理職と共に、対応方針を協議し、校内で支援体制をとった。②YPアセスメントを学年で分析し、それを生かし、いじめが起こらないような学級の雰囲気をつくり、未然防止に努めた。③校内研修を行い、いじめ防止に対する意識を全教職員が高めつつあるという努めができた。未然防止のための情報共有のしかたについては、今後の課題である。	A
人材育成・組織運営(働き方)	①校内研修を通し、キャリアステージに応じて、自ら学ぶ意欲を高める。②ミドルリーダーが中心的な役割を担うよう組織づくりに努め、リーダー性を高める。また、キャリアステージの異なる職員が共にチームで動き、より効率的な運営を図る。③会議の日程を工夫したり、効率のよい進め方を行ったりすることで、質の高い働き方を目指す。	①重点研究の道徳科を中心に、教職員全体の学ぶ意欲が高まるような校内研修を計画運営した。②今年度の新たな組織の枠組みの中で、ミドルリーダーが中心となって推進していくことが増えた。今後は、ミドルリーダーが組織間の連携を図っていくことができるようにしていく。③効率のよい進め方を教務部中心に工夫して会議が定時で終了できるようになり、より質の高い働き方につながった。	A
児童生徒指導	①「とおかスタンダード」を保護者にも周知し、学校と家庭との連携を図る。学校として、保護者の思いを受け止め、共通の理解に立って児童指導を行う。②児童理解推進委員会において、児童指導に関する問題を把握し、早期の対応を図るようとする。学年やブロックで問題を共有し、対策を練り、専任と連携を図ることで、より組織的に対応できるようにする。	①保護者と児童の情報共有しながら、よりよい方向性を模索して教育活動行ってきた。連絡帳や電話連絡など適切な方法を通して、お互いの理解を深めてきた。②児童理解推進委員会において、児童に必要な対応を話し合い、学年のみならず、全職員で課題を共有してきた。多くの職員が関わりを持つ事で、児童の良い引き出すことができた。引き続き児童が自信をもって取り組めるよう努めている。	A
特別支援教育	①支援が必要な児童をYPアセスメントなどを活用して把握し、学習活動を行う場合に生じる困難さに応じた指導方法の工夫を、計画的・組織的に行う。②個別支援学級では、一人ひとりのニーズに合わせたきめ細かな指導や支援をしていく。また、全教職員が関わり方のモデルとなり、個性を認め合い、尊重し合える雰囲気や学校全体でつくる。③特別支援教室や国際教室との連携を図り、一人ひとりの課題や特性に応じた支援ができるようにする。	①学級担任だけでなく、専科や専任、養護教諭など多くの職員が児童に関心をもち、多面的に関わることで、児童の興味を引き出すことができた。②個別支援学級では、個別の支援計画に基づいてきめ細かい支援を行ってきた。児童の成長を見守りつつ、適切な指導を行ってきた。③国際教室担任と学級担任との連携を図りながら、一人ひとりの課題に向き合っ学習内容を充実させてきた。	A
a14	a24		
a15	a25		
ブロック内評価後の気付き	例年行っている小中一貫教育の授業参観、情報交換等は、感染症予防のため、今年度は具体的な取り組みとして実施することができなかった。そこで、豊岡小としては、ブロック内で共有している「問題発見・解決能力」「自分づくりに関する力」の資質能力の育成を意識して、教育活動を行ってきた。各教科領域の指導では、主に道徳の授業づくりを中心に授業改善の視点をもって取り組んだ。また、たてわり活動や、行事を通して、自己肯定感が得られるような指導を続けてきた。次年度は、ブロック内で足並みをそろえて、授業参観や情報交換を行ってきたい。		
学校関係者評価	・二学期制への移行について、鶴見中ブロックとの統一が図れるとよい。日課表の変更や宿泊行事の変更もメリットを保護者に伝えていくことが大事。学校運営がスムーズにいけば、子どもにも良い影響が出る。 ・少しずつ行事がもどってきている。運動会は来年2名参加も考えるが、校庭の規模、児童数、感染状況などを考慮しながら決めていく必要がある。 ・学校評価からは挨拶への意識の低下が気になる。地域とのつながりが復活していけば顔を覚え、挨拶が増えていくと思われる。まずは教職員、保護者、大人の意識を変えていくことが大切。		
中期取組目標振り返り	二学期制へのスムーズな移行を目指し、日々の授業、学校行事、地域行事を行ってきた。次年度は、変更点をより明確に周知し、保護者と共有していく。また、自分の思いや考えを伝える学習場面を設け、伝えようとする意欲を高める取り組みは、次年度も課題として、引き続き取り組んでいく。次年度の創立100周年は、教職員、児童、一人丸となって取り組み、記憶に残る1年を創りあげていきたい。		

重点取組分野	令和5年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
授業改善	①各教科、育成を目指す資質・能力を明確にして授業を計画し、誰もが「わかる」「できる」「楽しい」学びを目指す。②自分の思いや考えを表現する活動を意図的に取り入れ、子どもたちが主体的・対話的に学び、高め合うことができるようにする。③各学年の学力学習状況調査の結果を分析し、授業改善に生かす。		
人権教育	①たてわり活動の異学年による活動や交流をより充実させることで相手を思いやる心を育み、誰もが自己有用感を感じられるようにする。②豊かな心の育成のために、道徳を重点研究の教科として取り上げ、よりよい授業づくりを目指す。③一人ひとりが自己有用感を感じられるように、学習の成果を互いに見合う場面や、生活のさまざまな場面で、互いを認め合う活動を取り入れる。		
健康教育	①校医との連携を図り、歯・口の健康づくりを推進し、自らの健康についての意識を高める。②体育学習の充実を図ったり、運動する場所や機会をつくらせることで、運動に親しめるようにする。③栄養分野についての理解を深め、自らバランスのとれた食事をとれるよう、食育教育を推進する。		
地域学校協働活動	①学校だよりや学年だより、ホームページを通じて、学校の様子や学校の方針を積極的に発信する。②学校運営協議会では、学校経営方針について分かりやすく伝え、協議会からの意見をもとに学校運営の改善をしていく。③学校・地域コーディネーターとの連携を図りながら、学習、行事のボランティアを募り、地域との協働的な活動を推進する。		
いじめへの対応	①いじめ防止対策委員会で、認知したいじめ案件を管理し、組織的に解消へ向かわせる。②YPアセスメントの分析を生かし、いじめが起こらないような学級の雰囲気をつくり、未然防止に努める。③いじめ防止等の研修を充実させ、全教職員のいじめに対する意識を高める。		
人材育成・組織運営(働き方)	①校内研修を通し、キャリアステージに応じて、自ら学ぶ意欲を高める。②ミドルリーダーが中心的な役割を担うよう組織づくりに努め、リーダー性を高める。また、キャリアステージの異なる職員が共にチームで動き、より効率的な運営を図る。③会議の日程を工夫したり、効率のよい進め方を行ったりすることで、質の高い働き方を目指す。		
児童生徒指導	①「とおかスタンダード」を保護者にも周知し、学校と家庭との連携を図る。学校として、保護者の思いを受け止め、共通の理解に立って児童指導を行う。②児童理解推進委員会において、児童指導に関する問題を把握し、早期の対応を図るようとする。学年やブロックで問題を共有し、対策を練り、専任と連携を図ることで、より組織的に対応できるようにする。		
特別支援教育	①支援が必要な児童をYPアセスメントなどを活用して把握し、学習活動を行う場合に生じる困難さに応じた指導方法の工夫を、計画的・組織的に行う。②個別支援学級、国際教室では、一人ひとりのニーズに合わせたきめ細かな指導や支援をしていく。また、全教職員が関わり方のモデルとなり、互いに認め合う雰囲気や学校全体でつくる。③特別支援教室では、一人ひとりの課題や特性に応じて学習や社会的スキル、不登校の支援を行っていく。		
a14	b9		
a15	b10		
ブロック内評価後の気付き			
学校関係者評価			
中期取組目標振り返り			

重点取組分野	令和6年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
授業改善	c1		
人権教育	c2		
健康教育	c3		
地域学校協働活動	c4		
いじめへの対応	c5		
人材育成・組織運営(働き方)	c6		
児童生徒指導	c7		
特別支援教育	c8		
a14	c9		
a15	c10		
ブロック内評価後の気付き			
学校関係者評価			
中期取組目標振り返り			